

## シュヴァルツェスマーケン・えくすとら♪

### 第4話「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄 ちゃああああああん！！」

#### 1. アスクマンとのデート

あの料理対決から一夜明けた、よく晴れた清々しい日曜日の朝9時。

テオドールとリズの自宅から電車で3駅程の繁華街…その待ち合わせスポットとして有名な噴水において、多くのカップルや親子連れたちが幸せそうな表情で集まっている。

そんな中で私服姿のテオドールもまた、幸せそうな周囲のカップルたちとは完全に浮いてしまった落ち着かない表情で、腕組みをしながらずっとその場で待機していたのだが。

「…ごめ～ん、待った～？」

とっても幸せそうな爽やかな笑顔で、アスクマンがテオドールに手を振りながら駆け寄ってきたのだった…。

とっても引きつった笑顔で、テオドールもアスクマンに手を振り返す。

「い、いや、今来た所ですよ…。」

「昨日は君とのデートが待ち遠しくて、興奮して眠れなかったよ。だけど今日は存分に君を楽しませると約束させて貰うよ。」

「は、はあ…。」

「今日のデートのプランは私に任せておいてくれたまえ。以前から君と一緒に観てみたかった映画があるんだ。さあ、私と一緒にいこうか。」

アスクマンはテオドールと手を繋いだ。

恋人繋ぎだった。

(ねえねえお母さ～ん、何であの人たち、男同士で手を繋いでるの～?)

(しーっ、近付いたらいけません!!)

(何あの人たち恋人繋ぎなんかして、もしかしてホモ?ホモなの?)

(気持ち悪いよね～。)

周囲の自分たちを嘲笑うかのような鋭い視線が、テオドールには痛い。物凄く痛い。

なんかもう、完全に周囲のカップルや親子連れたちから浮いてしまっていた…。

「ルルル～ンルンル～ン～ラララ～ンランラ～ン♪むふふふふふふ…。」

そんな屈辱的な羞恥プレイに晒されているテオドールとは対照的に、なんかアスクマンが物凄く幸せそうな表情で、テオドールを映画館へと連れて行ったのだが…。

「おのれアスクマンめ!!私のお兄ちゃんをあんな晒し者しやがって!!」

リズが全身から漆黒のオーラを放ちながら、料理対決でアスクマンに敗北したアイリスディーナ、

カティア、アネット、ファム、キルケ、ベアトリクスと一緒にやたらと目立つ変装で、物陰からテオドールとアスクマンを監視していたのだった。

と言うか、その異様な光景が周囲からあまりにも浮いてしまってるものだから、彼女たちもまた周囲のカップルや親子連れたちから白い目で見られてしまっていたのだが…。

「ちょっとアイリス、もっと前に行きなさいよ！！全然あの2人が見えないじゃないのよ！！」

「駄目だ、これ以上前に行けばテオドールに見つかってしまう…と言うかベアトリクス、何故お前までもがここにいるのだ！？」

「私はテオドールが欲しいのよ！！どうしても欲しくなってしまったのよ！！」

「この浮気者が！！お前には兄上がいるだろうが！！」

「テオドール君ったら、何で私よりもあんな変態野郎を選んだのよ！？私がどんな想いで貴方が働くファミレスに毎日通っていると思ってるの！？」

「いやキルケさん、前々から疑問に思ってたんですけど…テオドールさんに毎日会いたいなら、うちのファミレスで働いた方が早くないですか？」

「私の学校はバイトが一切禁止なのよ！！本当にお嬢様学校ってのは堅苦しいんだから！！」

「皆ちょっと待って！！テオドールたちが今から観る映画って…これって…まさか…！！」

「テオドール君ったら、そんな趣味があったの！？私の事は全然お姉ちゃんって呼んでくれないくせに！！」

テオドールとアスクマンが手を繋ぎながら訪れた映画館…そこで上映される映画のタイトルを見て、アイリスディーナたちは絶句してしまっていたのだった。

どうやらアニメ映画のようなのだが、映画館に貼られているポスターには、顔を赤らめながら抱き合う3人の少年の姿が。

よく見ると映画館に訪れる客層も、なんか腐った女子たちが大半を占めていたのだった…。

「何だあの訳が分からない映画のタイトルは！？」

「最近話題になってるホモアニメよ！！アスクマンの野郎、お兄ちゃんに何て物を見せようとしてるのよ！？」

そんな中で男同士で手を繋ぐテオドールとアスクマンの姿を目撃した周囲の腐った女子たちが、顔を赤らめながら一斉にキャーキャー騒ぎ始めている。

なんかもう耐えられないといったテオドールとは対照的に、アスクマンの姿は実に威風堂々とした物だった。

「代金は是非私に奢らせてくれたまえ…高校生2人でお願いします。」

「…はい、丁度頂きますね。上映は9時30分からとなっております。本日はご来場頂き、誠にありがとうございました～」

「さあ行こうかテオドール君。はぁーっはっはっはっはっは！！」

アスクマンに引きずられながら、泣きそうな表情で館内へと連行されるテオドール。

そんな2人の光景を見た周囲の腐った女子たちが、なんかもう物凄く興奮した表情で慌てて後を追いかけていく。

「…ふむ。我らと同じく、性別を超越した愛を育む若者たちがいるとは、実に嬉しい限りだな兄者よ。」

「そうだな。我ら統一ドイツの将来も実に明るいな弟者よ。」

「そういう意味では今日の映画の新作も、実に楽しみだな兄者よ。」

「うむ。果たして今回は、どんな少年たちの愛憎劇を見られるのか、実に楽しみだな弟者よ。」

それに続くように屈強な肉体を誇る2人の男が恋人繋ぎをしながら、チケットを購入して威風堂々と館内へと入っていく。

やばい、やばいやばいやばい。

何だかこのままだとテオドールとアスクマンが、あの2人のようになってしまいそうな気がする。

それを危惧したアイリスディーナたちも慌ててチケットを購入して、テオドールとアスクマンを追って館内へと入場したのだった…。

## 2. 映画

『ペガサス流星拳—————っ！！』

『ぐああああああああああああああ！！』

光牙の無数の光速拳をまともに受けた魔王サタンが、口から血を吐きながら壁に叩き付けられたのだった。

驚愕の表情で、魔王サタンは自分を倒した光牙を睨み付けている。

『馬鹿な…この私が、魔王であるこの私が、たかが青銅(ブロンズ)如きに…っ…！！』

『やったぞ！！魔王サタンを倒したぞ！！』

『やったね光牙！！これで世界に平和が訪れるよ！！』

『ああ、俺とお前の愛が生んだ勝利だ！！』

そして光牙は、駆け寄ってきた龍峰を押し倒す。

顔を赤らめながら、龍峰は自分を押し倒した光牙の顔を見つめていたのだった。

『こ、光牙…』

『龍峰…もういいだろ…俺はもう我慢出来ないんだ…』

『だ、駄目だよ光牙…僕は…』

『龍峰…もう何も言うな…』

光牙と龍峰の唇が触れ合おうとした、まさにその瞬間。

『そこまでだ光牙！！そんな事はさせないぞ！！』

『お前は…エデン！！』

『お前に龍峰をやらせはしない！！』

『くっ、またしても俺と龍峰の愛を邪魔しようってのか！！エデン！！』

魔王サタンとの戦いで満身創痕になりながらも、それでも力強く立ち上がった光牙が、自らの小宇宙(コスモ)を爆発させたのだった。

その光牙の極限まで高められた小宇宙によって、光牙のペガサス座の青銅聖衣(ブロンズクロス)が、まさに究極へと進化を遂げていく。

『龍峰は俺の物だ！！誰にも渡さん！！うおおおおおおおお！！』

『ああっ、これは…光牙の聖衣(クロス)がまさしく神々しい輝きを…まさかこれは…！！』

『くっ、光牙め…お前も遂に神聖衣(ゴッドクロス)を纏うまでになったか！！』

『そうだ！！これこそが俺と龍峰の愛の結晶だ！！』  
『誤解を招くような言い方は止めてよお、光牙あ(泣)！！』

神々の力を宿した究極の神聖衣を纏った光牙の、その美しくも神々しい姿を見せつけられたエデンが、圧倒的なプレッシャーの前に思わず後ずさってしまう。  
だがエデンもまた、ここで引く訳にはいかないのだ。

『・・・光牙よ・・・神聖衣を纏えるのが、お前1人だけだと思ったら大間違いだぞ・・・！！』  
『な、何いっ！？』  
『極限まで生まれ！！僕の小宇宙よ！！はあああああああああああああああつ！！』  
『ああつ、そんな！！エデンのオリオン座の青銅聖衣もまた、光牙と同じように神聖衣に！！』  
『馬鹿な！！エデン、お前も神聖衣を！？』  
『お前に龍峰をやらせはしないと断ったはずだ！！光牙あつ！！』

2人の光速拳がぶつかり合い、周囲に無数の閃光が走る。  
その凄まじい戦いを龍峰は、ただ黙って見ている事しか出来なかった・・・。

『くっ、エデン！！お前もそこまで龍峰の事が好きなのかよ！？』  
『・・・光牙・・・！！』  
『だがな、龍峰は俺の物だ！！俺は将来龍峰と結婚するんだ！！』  
『そんな事はさせないと言ったはずだぞ、光牙！！』  
『お前なんか俺と龍峰の愛は邪魔させないぞ！！うおおおおおおおお！！』  
『はあああああああああああああああああああああつ！！』

2人の小宇宙がさらに高まり、まさにセブンセンスを超えた究極の小宇宙・・・オメガを発動させたのだった。  
究極にまで高められた2人の必殺の拳が、互いに向けて放たれる。

『ペガサス彗星拳—————！！』  
『オリオンズ・エクスターミネーション！！』  
『ああつ・・・光牙あ！！エデン—————！！』

凄まじい技の激突・・・だが勝利したのはエデンだった。  
壁に叩き付けられた光牙を、エデンが押し倒すような形になる。

『ぐっ・・・馬鹿な・・・っ！！』  
『光牙・・・！！』  
『お、俺は・・・龍峰を・・・龍峰を・・・！！』  
『・・・何故だ光牙・・・何故僕の気持ちに気付いてくれないんだ、光牙・・・！！』  
『な、何いっ！？』

大粒の涙を流しながら、エデンは光牙に自らの気持ちを告白したのだった。

『僕は・・・僕は・・・お前の事が好きなんだ！！光牙あつ！！』  
『な・・・何だっってえっ！？』  
『僕はずっと前から、お前の事が好きだった・・・なのにお前が考えるのは、いつもいつも龍峰の事ばかり・・・！！』

何と言う事だ。エデンは光牙から龍峰を奪おうとしていたのではなく、逆に龍峰から光牙の事を奪おうとしていたというのだ。

そのエデンの想いを知った光牙と龍峰は、予想もしなかった事態に啞然とした表情になる。

『光牙・・・お前を龍峰などには渡さん！！お前がどうしても龍峰と結婚するというのであれば、僕は力尽くでもお前を僕の物にする！！』

『くっ・・・エデン、お前・・・！！』

『光牙あっ！！』

そのまま光牙と唇を重ねようとしたエデンだったのだが。

『や、やめてよおおおおおおおおおおおおおおおっ！！』

『うおおおおおおおおおおおっ！？』

慌てて龍峰がエデンを突き飛ばし、光牙を守る盾となったのだった。  
うるうるさせた瞳で、龍峰は顔を赤らめながらエデンを見つめている。

『やめてよエデン・・・エデンが光牙を汚すなんて、僕には耐えられないよお！！』

『おのれ龍峰め！！僕と光牙の愛を邪魔するというのか！？』

『・・・そうだよ・・・僕は君と光牙の愛の邪魔をする・・・君が光牙を汚すなんて耐えられない・・・  
だって・・・だって・・・！！』

精一杯の勇気を込めて、龍峰はエデンに自らの想いをはっきりと告げた。

『・・・僕が好きなのはエデン！！君なんだあっ！！』

『な・・・何iiiiiiiiiiiiっ！？』

『うおおおおおおおおおっ！！』

龍峰の凄まじい小宇宙が、龍座の青銅聖衣を神聖衣へと進化させたのだった。  
予想もしなかった事態に、光牙もエデンも啞然とした表情になる。

『馬鹿な・・・龍峰が好きなのは俺じゃなくてエデンだって・・・！？』

『そうだよ光牙・・・僕はずっとエデンの事が好きだったんだあっ！！』

『なんてこった・・・それじゃあ・・・それじゃあ・・・！！』

光牙は龍峰が好き。

龍峰はエデンが好き。

エデンは光牙が好き。

光牙は龍峰が好き。

龍峰はエデンが好き。

エデンは光牙が好き。

光牙は・・・

『こ・・・これは・・・千日戦争(ワン・サウザンド・ウォーズ)の状態になってしまっている！！』

物陰からその様子を見ていた栄斗(はると)が、驚愕の表情で蒼摩(そうま)に告げたのだった。

『千日戦争だってえっ！？何じゃそりゃあっ！？』

『実力が拮抗する黄金聖闘士(ゴールドセイント)同士が、全力で戦うと起こるとされている現象だ…あまりにも実力が拮抗し、かつ強大な力を有するが故に、永遠に決着が付かなくなってしまう状態…それが千日戦争だ。』

だがいかに神聖衣を纏っているとはいえ、まさか青銅聖闘士(ブロンズセイント)同士の戦いで千日戦争に陥ってしまうとは。栄斗は驚きを隠せなかった。

光牙は龍峰が好き。  
龍峰はエデンが好き。  
エデンは光牙が好き。  
光牙は龍峰が好き。  
龍峰はエデンが好き。  
エデンは光牙が好き。  
光牙は…

確かにこれは見事に、いつまで経っても決着が付かない、まさに千日戦争の状態に陥ってしまっているのだが…。

『…いや、これ千日戦争とか全然関係無くね(汗)？』

『このままでは永遠に決着が付かないぞ…どうするつもりなんだ、光牙、龍峰、エデン！！』

互いに向かい合ったまま、全く身動きが取れないでいる光牙、龍峰、エデン。  
一体これからどうなるのか…栄斗も蒼摩も固唾を呑んでその様子を見守っていたのだが、  
だが、その状態からおよそ2分が経過した時だった。

『『『…ひしいっ(泣)！！』』』

目から大粒の涙を流しながら、3人が互いの身体を抱き締め合ったのだった。

『な、何いっ！？』

『へへっ、そう来たかよ！！全くあいつらも世話が焼ける連中だぜ！！なあ栄斗！？』

『ああ、まさか3人で恋人同士になる道を選ぶとはな…！！』

『何だかんだ言っても、あいつらは誇り高きアテナの聖闘士(セイント)って訳だ！！』

『ああ、今夜は祝杯だな！！…俺たちはまだ未成年だからジュースでな。』

『今日はとことんまで付き合うぜ、栄斗！！』

感動の表情で栄斗と蒼摩は、愛を確かめ合う3人の姿を見つめていたのだった…。

### 3. 昼食

「…な…何だこのアニメ…(汗)。」

訳が分からないといった表情で、テオドールは目の前で流れるスタッフロールを見つめていたのだった。

周囲の腐った女子たちは一斉に盛大な拍手を送り、中には感動のあまり大粒の涙を流す者たち

さえもいる始末だ。

テオドールの隣に座っているアスクマンもまた、感動の表情でブラボーとか叫びながら、盛大な拍手を送っている。

「何と言う事だ…まさかこういう結末になるとは思ってもみなかったな。兄者よ。」

「ああ、まさか3人で恋人同士になるとはな。弟者よ。」

「これも3人の愛の強さの証という訳だな、兄者よ。」

「我らもあの3人と同様の、いや、それ以上の愛を深めていこうではないか、弟者よ。」

先程の屈強な男2人も、感動のあまり目から溢れて止まらない涙を、ひたすらハンカチで拭い続けている。

その2人の様子をリズたちが、何とも気持ち悪そうな表情で見つめていたのだった。

やばい、やばいやばいやばい。

このままだとテオドールが、この2人のようになってしまいかねない。

「ア…アスクマンの野郎、お兄ちゃんに何とんでもない映画を見せてんのよ!？」

「おのれアスクマンめ、私の未来の夫を、このまま変な趣味に目覚めさせる訳にはいかん!!」

「あ、皆ちよっと待って!! テオドール君たちが外に出るわよ!!」

キルケに促され、リズたちは慌ててテオドールとアスクマンの後を追いかける。

アスクマンに恋人繋ぎされながら、テオドールが連れて行かれた先…そこはテオドールがバイトしてるファミレスと同じ系列の支店だった。

現在時刻は12時を回っている。どうやら映画を観ている内に丁度昼食の時間帯になってしまったようだ。

休日の昼間という事もあり店内は大変混み合っていたのだが、それでも丁度席が空いたようで、テオドールとアスクマンは意外とすんなりと席に着く事が出来たのだが…。

「いらっしやいませ…何だテオドール君か。」

注文を聞きに来たのは、この支店の様子を見に来ていたユルゲンだった。

事務所で店長と打ち合わせをしていた最中、今日のシフトに入っていたバイトが突然交通事故に遭って来られなくなったという連絡が入り、急遽ユルゲンが接客を手伝う事になったのだが。

「お、お久しぶりです、ユルゲンさん。」

「アイリスとはその後も仲良くしてくれているようで何よりだ。」

「いや、て言うか彼女、毎朝のように俺の家に押しかけてきて、何故か俺のベットに潜り込んで添い寝してくるんですけど(泣)!？」

「はっはっはっはっは。仲睦まじいようで何よりじゃないか。」

「いやいやいやいやいや、恥ずかしいっつらないですよ!! それでリズとは毎日のように喧嘩になるし(泣)!!」

「別に恥ずかしがる事は無いじゃないか。君は将来私の弟になるかもしれないんだからね。」

「だから話が突拍子過ぎるんですよユルゲンさん(泣)!!」

だが2人の会話を聞いていたアスクマンが突然不愉快そうな表情になり、テオドールとユルゲンに食ってかかったのだった。

「酷いじゃないかテオドール君!! この私という存在がありながら、私の目の前で他の女の話に

夢中になるなんて！！」

「はあ！？何言ってるんすかアスクマン先輩！？」

「君は今私とデートしているのだよ！？それなのにアイリスディーナの話題を振るなんて失礼にも程があるじゃないか！！」

ユルゲンは一瞬、アスクマンが何を言っているのか理解出来なかったのだが。

数秒の間を置いた後、アスクマンの言葉の意味を理解し…とつても引きつった笑顔をアスクマンに見せたのだった。

「…あの…テオドール君のバイト先の上司として一応確認しておきますが…お客様はテオドール君とはどういう関係で…」

「私の最高のパートナーですよ。店員さん。」

「…一応念の為に聞いておきますが、それはあくまでも学校生活における、先輩後輩という間柄でよろしいのですよね？」

「いやいやいやいやいや、私とテオドール君の関係は、そんな生ぬるい代物ではありませんよ、店員さん。」

「…あの、ですからそれはテオドール君にとって、ただの頼りになる先輩という意味でよろしいのですよね？」

「はっはっはっはっは。私とテオドール君の絆の深さを理解して下さらないとは残念極まりない。私は将来テオドール君と結婚したいと本気で思っているのですよ！！」

アスクマンが威風堂々と立ち上がり、高々と宣言した直後…店内が静寂に包まれた。

そして次の瞬間、店内が物凄い喧騒に包まれてしまったのだった…。

客の中には先程のホモ映画を見ていた腐った女子たちも混ざっていたようで、顔を赤らめてキャーキャー言いながらテオドールとアスクマンを見つめている。

中には感動のあまり、目から大粒の涙を流して号泣する者までも。

「まさか公衆の面前で堂々と結婚宣言とはな。あの青年も中々やるじゃないか兄者よ。」

「そうだな。さすがに今の我々では、あそこまでの大胆な真似は出来ないな。弟者よ。」

「我ら統一ドイツの将来は明るいよな、兄者よ。」

「彼ら2人が、我々のような者たちの希望の星になってくれればいいよな、弟者よ。」

先程の屈強な男2人も、目を輝かせながらテオドールたちを見つめている。

だがアスクマンの結婚宣言を聞いたユルゲンは、物凄い表情でテオドールに食ってかかったのだった…。

「…テオドール君。僕は別に君が妹を選んでくれなくても、それは君自身の選択なのだから仕方が無い事だと常々思っているのだがね。」

「は、はあ…。」

「だからと言って変な趣味に走ってはいかんぞ！？」

「いやいやいやいやいや、変な勘違いしないで下さいよ！？アスクマン先輩が勝手に盛り上がってるだけですってば(泣)！！」

「僕は君に期待しているんだよ！？妹の事だけではない、将来の会社の未来を背負って立つ男としてもね！？」

「ええそれはもう重々承知してますよ本当に(泣)！！」

なんかユルゲンに、とんでもない勘違いをされてしまったようだ…。

「と、取り敢えずユルゲンさん、店が混雑してますから、そろそろ注文を聞いた方がいいんじゃないですか(泣)！？」

「…っと、そうだった。僕とした事がうっかりしていたよ。」

例えば店に知り合いが客として来ても、仕事中は必要以上にお喋りに興じるな、私情に走るな…テオドールやリズを含めて、常々店員たちにそう教育しているユルゲンだったのだが。

役員である自分がこの醜態では、他の店員たちに示しがつかない。

気を取り直してユルゲンは、テオドールたちに改めて注文を確認したのだが…。

「えーと、お客様、ご注文は…」

「俺はチーズインハンバーグのAセットで。」

「…そうだね、私もテオドール君と同じ物を頼もうかな。それと…」

メニューを興味深そうに眺めていたアスクマンが、とんでもない商品を注文したのだった。

「…店員さん。この『カップルドリンクバー』をお願いします。」

それは大きなコップにストローが2つ付いた、カップル限定の良くある代物だった…。

1つのコップに入ったジュースを、2人で一緒にチュウチュウしながら飲むとかいうアレである。

「…あの、お客様、こちらの商品はカップル限定となっております…」

「カップルドリンクバーをお願いします。」

「ですから、こちらの商品は…」

「カップルドリンクバーをお願いします。」

「そもそもAセットにはドリンクバーが付いておりますので、そちらを注文なさると別料金に…」

「カップルドリンクバーをお願いします。」

「…か、かしこまりました…」

タブレットにピッ、ピッ、ピッと注文を入力するユルゲンの表情が、物凄く引きつっていた。

そして去り際にテオドールの耳元に、そっ…と耳打ちする。

「…テオドール君。明日バイトが終わったら、ちょ～～～～と2人で腰を据えて、今後の事についてゆ～～～～と話し合おうじゃあないか。ん～～～～～～？」

「ひ、ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい(泣)！！」

物凄い表情で調理室に消えていくユルゲン。

そして1分後、物凄い表情でコップとストローを持ってきた。

2人がかりで飲む代物という事もあってか、コップはかなり大きなサイズとなっており、普通のドリンクバーのコップと比べてもその大きさが際立っている。

「…お待たせ致しました。」

「テオドール君、飲み物はコーラでいいかな？」

「いやいやいやいやいや、俺は普通にドリンクバーで飲みますから！！」

「遠慮なんて君らしくないなテオドール君。今回の食事代なら全て私が払うから気にするな。」

テオドールの言葉も聞かず、アスクマンはさっさとコーラを注ぎに行ったのだった…。

「ちょっと何よアレ、何でカップルドリンクバーなんか頼んでるのよ！？まさかお兄ちゃんと2人で飲む気！？」

その様子をリズたちが別の席から、物凄い表情で睨み付けている。

尾行がバレないようにと派手な変装をしているのだが、テオドールにはバレていないようだが、アスクマンには完全にバレバレのようだった。

ふん、負け犬共が・・・！！そう言いたげな勝ち誇ったドヤ顔で、アスクマンはリズたちを完全に見下してしまっている。

「待たせてしまって悪かったねテオドール君。さあ私と一緒にコーラを飲もうではないか。」

「いやいやいやいやいや、だから俺は普通にドリンクバーで飲みますってばあ(泣)！！」

周りからの視線が痛い。物凄く痛い。

そんな視線を全く気にする事無く、大きなコップに刺された2本のストローの片方にアスクマンが恥ずかしそうに口を付けながら、注がれたコーラをちゅうちゅう吸っていたのだが・・・肝心のテオドールは全くコーラに手を付ける事が出来なかった。

と言うかこのコーラを飲んでしまうと、人として大切な何かを失ってしまいそうな気がしてきた・・・。

「お待たせ致しました、チーズインハンバーグのAセットでございま・・・」

「うおおおおおおおおおおおおおおお(泣)！！」

女性店員が持ってきたドリンクバーのコップを慌ててかつさらい、泣きそうな表情でコーラを注ぎに行くテオドール。

なんかこのドリンクバーのコップが、まるで神からの助けのように思えてきた。

「もう、テオドール君ったらあ、恥ずかしがり屋さんなんだからあ。」

そんなテオドールの気持ちなど知りもせずに、アスクマンはとても残念そうに、カップルドリンクバーに注がれたコーラを1人ぼっちで飲んでいたのであった・・・。

#### 4. 観覧車

それからテオドールはアスクマンに連れられ、ショッピングモールやら公園やらゲームセンターやら色んな所に足を運び・・・その度に周囲の者たちから物凄く白い目で見られてしまったのだった。

そうこうしている内に、あっという間に夕方になってしまい・・・遊園地の施設の中でも一際目立つ観覧車の中で、テオドールはアスクマンと2人きりになってしまっている。

2人を乗せた観覧車が、ゆっくりと穏やかな速度で、静かな音を立てながら上空へと昇っていく。

その様子をリズたちはとても悔しそうな表情で、ただ黙って見ている事しか出来なかった・・・。

「・・・ふう、やっと2人きりになれたね、テオドール君。」

「は、はあ・・・。」

「全くさっきから周囲の者たちが、やたらと好奇の目で我々を見つめるのには本当に呆れてしまうよ。まあ私とテオドール君の愛が羨ましいのは理解出来るのだがね。はっはっはっはっは。」

休日で家族連れやカップルなどで行く先々が混雑していた、今日のこれまでの喧騒がまるで嘘



だが次の瞬間、リズの全身から放たれた漆黒のオーラが、テオドールとアスクマンが搭乗する観覧車まで伸びていき、そのままアスクマンに殴る、蹴るの暴行を加えつつ、テオドールを優しく包み込んでしまった。

「あ、やめ、びで、いでえ(泣)！！」

「はああああああああああああああああああああああああ(泣)！？」

そして戸惑いを隠せないテオドールを回収した漆黒のオーラが、物凄い勢いでリズの身体へと戻っていく。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお(泣)！？」

「お兄ちゃああああああああああああああああああああああん！！」

そのまま落ちてくるテオドールを、お姫様抱っこして受け止めるリズ。

そして全身から漆黒のオーラを放ちながら、そのままテオドールをお姫様抱っこする体勢のまま、人気の少ない場所まで走り去ってしまったのだった。

あまりの一瞬の出来事だった為に、周囲の野次馬たちは呆然とした表情で立ち尽くしてしまっていたのだが、アイリスディーナたちだけはすぐに状況を理解し、慌ててリズを追いかけていったのだった。

「何なのだリズのあの凄まじいまでの力は！？と言うかあの身体能力は何なのだ！？」

「まさかあれが・・・恋愛原子核に秘められたもう1つの力！？」

「はあ！？一体何を言っているのだお前は！？」

リズを追いかけてながらベアトリクスは、様々な調査によって知り得た恋愛原子核についての知識を、驚愕の表情のアイリスディーナたちに語り出した。

「白銀武の恋愛原子核に影響された女性たちの中には、どういう原理なのかは知らないけれど、その身に凄まじいまでの力を宿した者が現れたというわ。」

「凄まじいまでの力だと！？一体どういう事なのだ！？」

「例えば、白銀武の幼馴染の鑑純夏(かがみ・すみか)・・・彼女は白銀武をグーパンチしただけで、遥か彼方まで吹き飛ばしたという記録が残されているのよ。」

「はあ！？グーパンチだけでって、えええ！？」

「それだけの力の影響を、テオドールの恋愛原子核がリズにもたらしたのだとしたら・・・！！」

リズのテオドールへの想いが、兄としてではなく1人の男性としての想いが、テオドールの恋愛原子核によって、リズの内に秘められた力を呼び覚ましてしまったとでもいうのか。

だが今はそんな事を考えている余裕はない。すぐにテオドールとリズを追いかけていければ。

「・・・あそこだ！！」

アイリスディーナたちが駆けつけた場所・・・そこは遊園地の中心部にある憩いの場・・・穏やかな緑に包まれた小さな公園だった。

漆黒のオーラに仰天する周囲の野次馬たちを完全に無視したリズが、テオドールを芝生の上に押し倒している。

なんかもう、テオドールは一体全体何が何だか、全然意味が分からないといった表情をしていた。

そんなテオドールとは対称的に、リズは今にも泣きそうな表情でテオドールを見つめている。

「・・・危ない所だったねお兄ちゃん。あんな変態野郎にキスされそうになるなんて・・・。」  
「ちょ、ちょっと、리즈、おま・・・」  
「だけど、私がお兄ちゃんを守るから。あんな変態野郎なんかにお兄ちゃんを渡さないんだから・・・うん、あの変態野郎だけじゃない、他の女たちにも誰にも・・・！！」

漆黒のオーラでしっかりと、しかし絶対に傷つけないように、テオドールを巧みに優しく押さえ込みながら、리즈はテオドールと唇を重ねようとしたのだが。

「抜け駆けは許さんぞ、리즈！！」  
「何い！？」  
「はああああああああああああああっ！！」

アイリスディーナが放った白銀のオーラが、テオドールを押し倒す리즈に襲い掛かる。それを리즈は漆黒のオーラで受け止めるものの、あまりの威力に吹っ飛ばされてしまった。

「ちいいいいいいいっ！！」  
「ちょ、アイリス、な・・・ええええええええええええええええ(泣)！？」  
「・・・アイリスディーナ・・・貴様さえ現れなければ、お兄ちゃんはあつ！！」

どうにか立ち上がった리즈は、全身から放たれた漆黒のオーラを爆発させる。それに対抗するかのよう、アイリスディーナも全身から放たれた白銀のオーラを爆発させた。

「あの青年がその身に宿す恋愛原子核に導かれ、2人の少女が遂に目覚めたか。兄者よ。」  
「これも恋愛原子核を持つ者であるが故の、青年が背負うべき宿命(さだめ)だな。弟者よ。」  
「ああ、1人の男を2人の女が奪い合う・・・恋愛原子核がもたらす深き業か、兄者よ。」  
「第三者の我らには一切手出しする事は許されない。見届けようではないか。弟者よ。」

리즈とアイリスディーナの戦いを、とても真剣な表情で見つめる屈強な男2人。  
なんかもう、訳が分からない展開になってきた・・・。

## 5. 高まる想い。ぶつかり合う想い。

漆黒のオーラを放つ리즈と、白銀のオーラを放つアイリスディーナ。  
2人はとても真剣な表情で、互いの事を睨み付けている。  
そんな2人の様子を、訳が分からないといった表情で見つめている野次馬たち。  
既に日が沈んで夜になろうとしている最中、僅かに残った夕焼けの光が、テオドールたちを優しく照らし出している。

と言うか当のテオドール本人は、一体全体何がどうなっているのか、全然意味が分からないといった表情をしていた・・・。

「・・・お兄ちゃん。私、お兄ちゃんの事が好き。お兄ちゃんの為だったら何でも出来るよ。」  
「リ、리즈！？」

なんかもう、ムードもへったくれも無い愛の告白になってしまっていた。

リーズ自身もそれは自覚しているものの、この状況ではもうムードとか悠長な事を言っている場合ではない。

アスクマンのような下衆野郎のせいで、テオドールが危うく汚される所だったのだ。

そうなる前に、テオドールを一刻も早く自分だけの物にしなければ・・・その想いだけが今のリーズを突き動かしていた。

リーズが放つ漆黒のオーラを、アイリスディーナは白銀のオーラで弾き返す。

「抜け駆けは許さんと言ったはずだぞリーズ。テオドールは私の未来の夫だ。」

「アイリスまで！？」

「その邪魔をするのであれば、例えお前でも容赦はしない！！」

アイリスディーナが放つ白銀のオーラを、リーズもまた漆黒のオーラで受け流す。

何だかよく分からないが力がみなぎってくる。テオドールを強く想えば想う程、アイリスディーナの身体から無限の力が溢れ出てくる。

一体この力は何なのか・・・アイリスディーナ自身にもよく分からなかったのだが、ただ1つだけ言える事がある。

今ここでリーズを倒さなければ、テオドールを自分だけの物にする事が出来ないという事だ。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

アイリスディーナが手の平に生み出した白銀のオーラが、一本の剣の形状になる。

そして旋風の如き速さで、アイリスディーナはリーズに斬りかかった。

剣術なんか全く心得が無いはずなのに、何故かアイリスディーナが繰り出す剣術は達人の域にまで達してしまっている。

「舐めるなああああああああああああああああつ！！」

リーズもまた手の平に生み出した漆黒のオーラを、一本の槍の形状に変えて迎撃した。

リーチで勝る槍による凄まじい打突の連打により、アイリスディーナを巧みに近寄せない。

リーズもまた槍術の経験なんて全然無いはずなのに、何故かリーズが繰り出す槍術は達人の域にまで達してしまっていた。

「・・・あの、ベアトリクス先輩・・・これもさっき先輩が言ってた、テオドールの恋愛原子核に秘められた力って奴なんですか？」

「私だって驚いてるわよ。まさかこれ程までだなんて・・・！！」

アネットの質問に、ただただ驚愕の表情で答えるしかないベアトリクス。

恋愛原子核に導かれた少女たちが、人外の力に目覚める・・・自分が集めた記録から情報だけは知り得ていたのだが、まさかここまでとんでもない事態になるとは思ってもみなかったのだ。

「お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんああああああああん！！」

「テオドールテオドールテオドールテオドールテオドールテオドールーっ！！」

互いに凄まじい戦いを繰り広げるリーズとアイリスディーナだったのだが、その時だ。

「・・・2人共、もう止めて下さいーっ！！」

カティアが全身から蒼白のオーラを放ちながら、2人の斬撃を受け止めたのだった。  
そして蒼白のオーラを爆発させ、リズとアイリスディーナを弾き飛ばす。

「・・・リズさん。アイリス先輩。私もテオドールさんの事が好きです。お兄ちゃんとしてではなく、1人の男性として。」

「はあああああああああああああ！？カティアまで何言ってるの！？」

「でもだからと言って、こんな互いを傷付け合うような決着の付け方、絶対に間違ってます！！」

カティアが放った蒼白のオーラが、リズやアイリスディーナを優しく包み込んだ。

それはまるで、カティアの母性を体現するかのよう。

カティアの蒼白のオーラに優しく包み込まれたリズとアイリスディーナは、まるで母親の胸に優しく包み込まれるかのよう、穏やかな眠気に包まれてしまう。

「女なら女らしく、堂々とテオドールさんに正面から告白して、それで決着を付けて下さい！！暴力でライバルを蹴散らすなんて許されない事です！！他人を傷付けるだけじゃない、自分自身も傷ついちゃうんですよ！？心も、身体も！！」

「・・・カティアちゃん・・・私だってそれ位分かってるわよ・・・それでも・・・それでもおっ！！」

お兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃんお兄ちゃん！！

そのリズの強い想いが、漆黒のオーラをさらに爆発させた。

リズが放った漆黒のオーラがカティアの蒼白のオーラを打ち破り、カティアを弾き飛ばす。

「きゃあああああああああああああっ！？」

「カティアーーーーーっ！！」

「それでもお兄ちゃんの周りには、いつもいつもいつもこうやって他の女たちが擦り寄ってくるから、仕方が無いじゃないのよおっ！！お兄ちゃんったら中学時代は全然モテなかった癖にさあっ！！」

弾き飛ばされたカティアに、リズはさらに漆黒のオーラで追撃しようとするのだが。  
だがそこへファムが放った桃色のオーラが、リズの漆黒のオーラを相殺した。

「駄目よリズちゃん。貴方はそんな子じゃないでしょ？」

「邪魔を、するなあああああああああああああっ！！」

「きゃあああああああああああああっ！？」

リズが放った漆黒のオーラが、ファムを派手に弾き飛ばす。

派手に地面に叩き付けられ、うずくまるファム。

それを目撃したテオドールの中で、何かプツンと切れた。

「・・・リズーーーーーっ！！」

怒りなのか、焦りなのか、悲しみなのか・・・よく分からないが、それでもテオドールの心の中を強い焦燥感が支配していた。

必死の形相で、テオドールはリズを芝生の上に押し倒す。

「何故だリズ！？何故ファム先輩とカティアを吹っ飛ばした！？あの2人はお前を救おうとしていたんだぞ！？それをおっ！！」



そして必死に両手を広げ、もうこんな戦いは止めろと、身体を張って説得する。

「何でこんな事になっちゃったんだよ！？もうこんな下らない争いは止めろよ！！」

「・・・お兄ちゃん・・・。」

テオドールの必死に説得を受け、リイズたちはオーラを解除したのだった。

全員が沈痛の表情で、一斉に落ち込んで下を向いたのだが・・・。

「・・・だって・・・だって・・・だってえっ！！」

リイズが大粒の涙を流しながら、テオドールの身体にしがみついて身体を震わせ、嗚咽する。

「このままじゃお兄ちゃんが、あの変態野郎に犯されるんじゃないかって、不安で不安で仕方が無かったんだもん！！」

「・・・リイズ・・・いやそれに関しては本当にごめんな(泣)。」

「お兄ちゃんが悪いんだからね！？お兄ちゃんが私じゃなくて、あの変態野郎とデートするなんて言うからあつ！！うわああああああああああああああああああああん(泣)！！」

堪え切れなくなったリイズは、とうとう人目もはばからずに号泣してしまったのだった。

とても申し訳無さそうな表情で、テオドールはリイズの身体を抱き締める。

その様子をアイリスディーナたちは、悲しみの表情で見つめている。

「7人の女を優しく包み込む1人の男か・・・中々いい物を見させて貰ったよな。兄者よ。」

「ああ、これも恋愛原子核の成せる技よな。弟者よ。」

「あの青年がこれからどういう道を歩むのか、実に楽しみよな兄者よ。」

「彼が我ら統一ドイツにとって、希望の光になればいいよな。弟者よ。」

そして屈強な肉体の男2人が、とても感動した表情でテオドールたちを見つめていたのだった・・・。